



九鬼 武先生



川上 隆先生



渡辺 稔先生



曾川 和則先生

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)

## 遠隔合同授業に関する実践研究の成果

明治大学AG5研究チーム 岸磨貴子・関温理・黒木歩／アグアスカリエンテス日本人学校長 九鬼 武  
サンホセ日本人学校長 川上 隆／リオデジャネイロ日本人学校長 渡辺 稔／サンパウロ日本人学校長 曾川 和則

2021年度はAG5(在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業)の遠隔合同授業に関する実践研究を始めて3年目、研究成果のまとめの年です。何を成し遂げたのか、何を伝えたいのか、考え始めると、あれもこれもとたくさんのアイデアが出てきて止まりません。その中でも特に、この3年間の実践研究で明治大学AG5研究グループ、AG5研究提携校4校の現場の教師、AG5事務局が共に積み上げてきた3つの研究成果を報告したいと思います。

## 明治大学 AG5研究チーム

岸磨貴子・関温理・黒木歩

成果の一つ目は、

遠隔合同授業の実践事例を通じた授業設計や学習環境デザインのノウハウです。たとえば、



遠隔合同授業では授業の導入部分が重要で、「子どもが「面白そう」「やれそう」「やってみたい」と思える仕掛けが必要です。「メキシコの学校とつながろう」というだけでは、共に学びたい、学んでいこうという意識は生まれません。「相手のことを知りたい」「相手に伝えたい」「一緒に学びたい」と思える仕掛けと場のデザインが重要です。また、目的や学習状況に合わせた授業設計が必要です。本研究では複数の実践事例を一斉授業型・発表型・発問型・対話型に整理し、各形態の特徴を明らかにした上で、教師の役割、レイアウト、実践に必要な機材やツール、授業の流れや工夫の観点から、その知見をまとめることができました。

二つ目は、遠隔合同授業の問題把握と多様な解決方法です。遠隔合同授業で教師が直面した課題への対応策で成功した事例のうち、繰り返し見られる「パターン」がいくつか出

てきました。それらを「問題の現状・解決のアクション・その結果」の三観点から簡潔に言語化、イラスト化して、パターンランゲージを制作しました。この制作プロセスを通して、問題解決に対する多様な対応についての共通認識がつけられました。多様な解決策が共有されたことで、教師は状況に合わせて自分に合った方法を選択、実施することができました。本研究では二十八種類のパターンランゲージを生成、AG5遠隔合同授業の「知恵の蔵」として要望のある学校への配布を予定しています。

三つ目の研究成果は、本研究を通して生まれてきた新しい挑戦です。本研究では、毎月一度、遠隔合同研修を継続的に実施してきました。その中で、教師の困りごとや「やってみたい」という興味関心を取り上げ、それに対応する活動を始めました。たとえば、グラフィックレコーディング。遠隔合同授業で、子どもの対話的な学びを支えるものとして始めた活動です。他にもオンライン上での子どもの顔出し(肖像権)の問題解決としてZoomの技術を使った活動も計画中です。教師の問題意識や関心から様々な活動が次々と生まれてきたのは教師の授業や子どもに対する見方、関わり方の広がりであ

り、新しい実践ができる環境が学校に整備されたということです。

研究開始当初、「合同遠隔授業って?」「どうやるの?」「意義は?」、そんな会話から実践が始まりました。遠隔合同授業の環境整備から授業設計へ、そして子どもや学校組織の変化(遠隔合同授業実施のための支援体制など)へと問題意識が変わっていきました。教師も子どもも学校もそして私たちも共に変化し、成長した三年間となりました。

二〇一九年度よりAG5に取り組んでいます。私が赴任した二〇年度は新型コロナウイルスによる休校で始まりました。しかしながら素早くICTを活用した遠隔授業を開始し、課題を解決しながらいち早く授業を軌道に乗せることができましたのはAG5の取り組みがあったからに違いありません。そしてさらに発展させた今年度は全学年、全教員がサンホセ日本人学校(以下、サンホセ校)との遠隔合同授業を行うことで、一層の教育の質向上のためのプログラム開発を進められまし



アグアスカリエンテス日本人学校  
(メキシコ) 校長 九鬼 武

た。この取り組みの中で感じたことを三points述べます。

一 直接授業、間接授業を取り入れ  
ての多様な授業形態の実施

サンホセ校との合同授業を実施する際のネットワークは、時差や授業時間の調整でした。しかし今年度よりライブで交流しなくても、事前に授業動画などを送信し合い、それを授業で活用することで間接交流の授業を実施することができました。双方の都合の良い時間に授業ができるので無理がなく、直接授業に向けての動機付けや深まりにもつながり、授業を柔軟かつ多様性を持って構想できるようなった点は大きな進歩と考えられます。これにより三年目となる今年度は全学年、全教員がサンホセ校との交流授業を行い、成果を上げることができました。

二 児童生徒の相手（サンホセ校の児童生徒）を意識した発言や発信

本校は一学級が二人から十二人です。人数が少ない学級では授業中の話し合いはいつも同じ相手となるので、互いの考えていることは良く分かるが、新たな視点やより考えを深めるという点において課題がありました。しかしサンホセ校との合同授業で他の同年年の児童生徒の意見を聞くことで、自分の考えを一層深めることができていました。また動画を撮影

する場面では、本校のことを知らない相手のことを考えて、どうしたら分かりやすく紹介できるかを考えたり、クイズ形式にするなど工夫をしたりして、普段以上に思考しながら表現していた姿が印象的でした。

三 教員の意欲向上にもつながった  
交流による新鮮な刺激

「次の交流授業が楽しみです」は多くの児童生徒の感想です。交流授業を重ねるごとに子どもたちの表情が明るくなり、相手の発言に頷いたり、自分の意見を積極的に述べたりする場面が多くなりました。他校と交流する中で良い刺激を受けて一層頑張ろうとしている姿を見ていると、今年度の研究テーマでもある「主体的、対話的で、深い学び」にもつながったことを実感します。本校の教員たちも児童生徒の変容を感じることで、ICTを活用した遠隔授業の工夫を日々行いながら、より質の高い授業を構想している姿が見られました。

コロナ禍にあって、十月現在まだ本校は分散登校を行っています。ICTを活用した遠隔授業により多くの教育の可能性を発見できました。今回のAG5の取り組みができたのもサンホセ校を始め、海外子女教育振興財団及び関係の皆様のご協力のおかげと深く感謝申し上げます。

サンホセ日本人学校（コスタリカ）

校長 川上 隆

本校は二〇一九年度よりAG5の取り組みを始めました。研究テーマは「ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発」。初年度は準備段階として共同研究校のアグアスカリエンテス日本人学校（以下、アグアスカ）と交流中心の遠隔授業を行いました。子どもたちは様々な意見交流をすることで、学びを深めていく楽しさを知りました。二年目の二〇年度は、世界的なコロナ禍の中、日々の遠隔授業に追われましたが、前年度から研究準備を進めていたおかげでスムーズに移行できました。子どもたちの学びを止めないよう学校全体でICT活用に取り組み、教員も子どもたちもスキルが段階に向上しました。毎日の遠隔授業が研究や研修となり、アグアスカとの合同研究授業に生かすことで学校や国の枠を超えた実践も可能になりました。そして最終年の今年度は取り組みが広く参考となるように研究を進めています（詳細はAG5ポータルサイトを参照）。



一 遠隔授業の長所と短所

私は二〇年度に赴任しました。以下、その感想を述べます。まず、教員全員（七名）で研究に取り組んできたことが一番大きいと感じます。二〇年度はコスタリカ政府の政令で四月から十二月まで遠隔授業が続きました。当初は手探り状態でしたが、問題点や解決策を各自が校内共有ドライブに入れ、打合せ等で確認することで全員の実践力を高めることができました。それが子どもたちの学習意欲や成果にもつながりました。遠隔授業の長所は、①間接交流（時差や進度の違いを考慮した録画共有）や直接交流が自在に組める、②少人数学級が、他校の同年多数と学習できる、③他校異学年との学習もできて様々な考えに触れられる、④国境を越えて様々な分野の専門家（ゲストティーチャー）に学ぶことができる等、これまで考えられなかった資源の有効活用ができ、子どもたちの学びがより広がりが深まることです。具体的には、新たな価値や不足している情報に気付くことや、自分の考えを深めることができる。相手に理解してもらうために、効果的な表現法を考え身に付けることができること等です。実際、本校では一学年一学級（一〜三名）で、教師とのやりとりが中心の授業ですが、遠隔合同授業ではアグアスカの子どもたちと一緒に学習でき、意欲的に取り組む

様子が印象的です。中学部では、キヤリア教育の一環として、様々な職業の方々に日本から遠隔授業をしていただき、生徒の専門的な知識が増え、自分たちの世界を広げることができています。通常とは違うコミュニケーションによって知識・技能を活用し、思考・判断・表現を繰り返すことで学びがより深まっているのです。今までなかなかできなかった取り組みが、離れていても時差がクリアできれば手軽に実現できるのが遠隔授業の最大の魅力だと考えます。

一方、①画面越しで子どもと直接向き合えない（関係づくりや指導の難しさがある）、②実技教科（理科の実験や音楽・体育・技家・美術の実技作業等）に向かないなどの短所もあるように思います。今年度もコストアリカ政府の政令で、一学期に七週間（三十五日間）の遠隔授業を余儀なくされました。そこで、中学部の理科は実験動画で遠隔授業を進め、対面授業に戻ってから実験を体験させることを重視しています。また、技術科の実技や作業は遠隔ではできないので、対面授業に戻ってから授業時数を増やして対応しています。

**二 対面授業を補完する遠隔授業**

我々教員は対面授業を大切にしてきました。それは、児童生徒と直接ふれあうことが何よりも大切である

ことを理解しているからです。ただ、対面授業ではできないことが、遠隔授業では可能になる場合が多々あります。日本人会の会長やJICA支所長によるSDGsの授業、東京の離島の小学校との間接録画交流、世界の日本人学校との合同授業（蘇州日本人学校主催）、隣国のパナマ日本人学校との定期的な交流授業もその例です。このように本校は対面授業の中に遠隔授業の長所をうまく取り入れた併用型（ハイブリッド授業）の活用を通し、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてこれからも研究・実践を続けていこうと考えています。

### リオデジャネイロ日本人学校 (ブラジル)

校長 渡辺 稔



二〇二〇年三月、突然日本国内全ての学校から子どもたちの明るく元気な声が消えました。リオデジャネイロ日本人学校も政府からの指示で休校となりましたが、幸いにも一九年度からAG5「ICTを活用した遠隔での教育の質向上のためのプログラム開発」の研究指定を受け、サンパウロ日本人学校（以下、SP校）と遠隔での研修や授業に取り組んでいたことも

あり、四月当初よりオンラインでの授業をいち早く開始できました。このように研究二年目はいきなり遠隔授業の実践から始まりました。本校が目指したのは遠隔会議システムを使った対話型授業です。児童生徒と教師のやりとりがあり、教室で行うのとできるだけ遜色のない授業提供を心がけました。最初は不慣れでしたが、様々なアプリを使い、情報交換しながら指導法を日々改善することで、遠隔授業を定着させることができ、徐々に教科数や授業コマ数を増やしていきました。特に本校が対面授業を再開してからは様々な授業形態で研究を進めました。外部講師を招聘<sup>しょうへい</sup>しての講演会や学校行事などもオンラインで実施できました。

パートナー校であるSP校とは、遠隔会議で研究についての協議を重ねました。「グローバルな人材を育成するにはどうしたらいいのか」、両校の考えを持ち寄り見えてきたのが「多様性を受け入れる」「柔軟で豊かなコミュニケーション力」「協働できる子ども」の三つのキーワードです。それらを踏まえ、小規模校である本校と中規模校であるSP校の特性に配慮しながら、三つの部会に分かれて研究を進めました。

三年目は二年目の反省を生かし、日常的にSP校の児童生徒との交流

を重ねることで互いを知り、話し合いも自然な形で行えるようになりました。少人数の本校児童生徒にとっては同世代の友達のような考えを知ることや、目的に向かって話し合いを重ねながら一つのものをつくり上げる活動は貴重な経験となりました。さらにこの交流は、他のAG5研究校児童生徒との交流や、ブラジルにあるマナウス日本人学校との合同授業へと広がりを見せています。学校と自宅、リオと日本をつないだハイブリッドでのオンライン授業、また日本在住のOB・OG、ブラジルの連邦大学生や日本語モデル校生徒との交流も行い、オンラインの可能性を広げる取り組みとなりました。新たな取り組みは、新たな課題を生みましたが、「できないではなく、どうしたらできるのか」を常に考えながら解決策を探ることで、着実にスキルを積み重ねることができました。

反面、オンラインの課題も見えてきました。不安定なネット環境への対応。子どもの集中力が続かない。画面に映らない児童生徒の様子が把握できない。教材研究（授業準備）に多くの時間が必要となる。技能教科など、オンラインに適さない科目への対応。児童生徒の健康面の懸念（特に目、運動不足）。ブラジルとの時差。学習以外の学校が担うべき役



割の欠如（人間関係・集団活動）など、課題も浮き彫りになりました。

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックで、社会は大きく変化しました。オンライン授業の可能性と課題を明確にした上で、対面授業に効果的に取り入れていくことが、新たな教育の進むべき道と考えます。研究は始まったばかりで、まだまだ多くの課題が残っています。しかし本校の研究成果が、今後の新たな教育の礎になれば幸いと考えます。

### サンパウロ日本人学校（ブラジル）

校長 曾川 和則

二〇一九年、「遠隔教育」という研究テーマに出会った当初、第一回校内研究会ではまさに戸惑いしかありませんでした。「何ができるのだろう」。ホワイトボードに書き出した、



たくさんの「？」と不安からスタートしました。

しかしAG5「遠隔教育」研究チームとして組織された中南米四つの日本人学校合同の研修会を重ねる中で、確かな光が見えてきました。

まずは先駆的な日本の学校の取り組み事例をベースに、「遠隔授業」の目的や内容、それに基づく四つのラ

イブ授業パターンに出会えました。児童生徒の学び方と教師のかかわり方から目指す授業のイメージを抱くことができました。また自己と授業の達成状況をはかるルーブリック評価の手法を獲得し、明確な指標を設定することの大切さを学びました。この指標を通して授業を振り返り、子どもの確かな成長とより良い授業づくりという視点から、次に目指すものを形にすることができました。

機器の扱い方や活用方法にも磨きがかかりました。定期開催された合同研修会は、互いの成果や課題を共有し、悩みや疑問を分かち合い、解決する場となりました。当初に抱いていた不安や戸惑いが楽しみや希望へと変わっていく時間となりました。本校とペアを組ませていただいたリオデジャネイロ日本人学校（以下、R J校）とは何度も話し合いを重ね、合同で「遠隔授業」を構成し、実践してきました。コロナ禍前の研究一年目は、R J校の校長先生、研究主任の先生を本校に迎え、顔をつき合わせて協議し、研究の柱立てを行いました。最初に取り組んだことは、研究テーマの設定。本研究を通して、両校の目指すものを言葉にしました。夜は懇親会。ペア研究の重要ポイントは、お互いに語り合い、分かり合

い、仲良くなることです。子どもた

ちの「遠隔合同授業」を始めるポイントもまさにここにあると言えます。本校とR J校が終着した「遠隔教育」のテーマ（研究主題）は、「多様性を受け入れ、柔軟で豊かなコミュニケーション力を持ち、協働できる子どもの育成」です。研究一年目は、

両校を遠隔システムでつなぐこと。自己紹介から始めて、学校を紹介したりして、街の見どころを教え合ったりして、仲良くなることを目指しました。まずは「やってみる」に重点を置き、道徳やプログラミングの合同授業を仕組みました。その中で、研究テーマのキーワードである「多様性」「コミュニケーション力」「協働」を具現化していく取り組みを進めました。研究の土台づくりとチームの結び付きに力を注いだ一年です。

突然のコロナ禍による学校閉鎖命令で幕を開けた研究二年目。「子どもたちの学びを止めない」ために、本校はいち早くオンラインの授業を立ち上げましたが、その背景には「遠隔教育」に取り組んでいた自信と研究成果がありました。学校が開けな

い中、日々オンライン授業を重ねながら、「遠隔授業」の可能性を切り拓き、オンラインでしかない「遠隔合同授業」を追究してきました。研究主題に迫り、達成するために次の「三つの子ども像」を打ち立て

「聞く力」「話す力」「発信する力」を授業の中で育成する具体的な力としました。

○多様性を受け入れる子ども  
○柔軟で豊かなコミュニケーション力を持つ子ども

○協働できる子ども  
また、この三つの力をつなぐものとして、私たちが追究したのが「人間関係力」です。オンラインで行う遠隔教育だからこそ、この力の育成を基盤とする新たな形の授業づくりを目指しました。

研究三年目。取り組みは、「子どもが主体的に学び、他者との協働を通して、新たな世界を開く授業」（目指す授業像）へと結実しました。この三年間の軌跡により、私たちは、次の二点を柱とする「遠隔合同授業」づくりを進め、授業を検証し合い、新たな形の授業「サンパウロ・プラン」の構想を抱いています。

#### ① 子どもが主体的に学ぶための教材

② 子どもが協働し、学びを深める学習展開  
「遠隔教育」研究のチャレンジはコロナ禍を乗り越え、輝かしい未来に向かう子どもたちが、新たな自分と世界に出会う道標となります。それは、紛れもなく私たち教師が変わり成長した三年間でもありました。